

日展東海展

中日賞 喜びの声

名古屋市内で1日に開かれた改組新第6回日展東海展の中日賞贈呈式で、県内から日本画、彫刻、工芸美術、書の4人が賞を受けた。喜びの声を紹介する。東海展は名古屋・栄の県美術館ギャラリーで16日まで開催中。10日は休み。

力強さと、内なる優しさ

大地を踏みしめて、伸び上がるように立つ男性。「力強さと同時に、内面から出てくる優しさを表現したかった」と振り返る。

愛知教育大(刈谷市)の大学院生。手で素材に触れながら制作することに魅力を感じ、大学から彫刻を始めた。入選は昨年に続き「回目。女性の少ない分野だけに、連続受賞に「これからも彫刻を頑張って、という激励だと感じた」と気を引き締める。

四月からは小学校の教員として働く。「子どもたちに彫刻の楽しさを伝えていきたい」。二十四歳。

(大府市神田町)



彫刻 柴田茜さん
「地平」

赤レンガ 歴史の重み表現

築百二十年の歴史的建造物「半田赤レンガ建物」(半田市)の内壁を描いた。「時代を乗り越えた壁でしか出せない重みを表現したかった」と話す。

濃いめに溶いた絵の具で画面に凹凸を作り、何層にも色を塗り重ねた。解体の危機を乗り越えて、時間とともに変化を重ねてきた壁の表情に迫った。

大学入学後に本格的に日本画を始め、一九九六年に初入選。五年前に京都から名古屋へ拠点を移した。「今後も新しい表現に挑戦していきたい」と意気込む。四十七歳。

(名古屋市天白区野並)



日本画 三上友子さん
「壁」

手紙文追究 紙もこだわり

中国・清代の書家楊見山に影響を受け、手紙のような形式の書を長年追究してきた。

受賞作は、同じく清代の文人・王壬秋による文章を、のびやかな書体で便箋にしたためた。「字陀紙」と呼ばれる丈夫な和紙を使い、木版で罫線を入れた。裏面には、木版で彫った四神の文様を刻印。紙にもこだわる姿勢からは、中国古典への敬意がにじむ。

入選九回目での受賞。「日がたつにつれて重みを感じる。今後も精進していこう」という決意を新たにしたい」と力を込める。六十一歳。

(名古屋市天白区横町)



書 高桑嚴風さん
「王壬秋文」

伝統の灰釉 現代的造形に

二十七回目の入選で射止めた中日賞に「賞には縁がない」と思っていたが、目立つ場所に展示してもらえた」と笑みを浮かべた。

作品は飛行機の翼の付け根のような、丸みを帯びた陶製のオブジェ。灰釉を施した表面には白い曲線がいくつも刻まれ、作品名にある「風」を連想させる。「瀬戸焼に千年以上使われてきた灰釉と、現代的な造形」の融合を目指した。

「作り手の命が宿った作品は時代を超えて生き延びる。僕の作品からも生き生きとした命を感じてもらえたら」。六十二歳。

(瀬戸市落合町)



工芸美術 波多野正典さん
「風の十字路で…」